

武江年表

二

別記

			二	和
			一	書
			九	門
			三	
			三	
九	三	三	號	類
冊	架	函		

庫文閣内			
二	二		和
一	一		書
函	九		
五	三		
架	冊	號	類

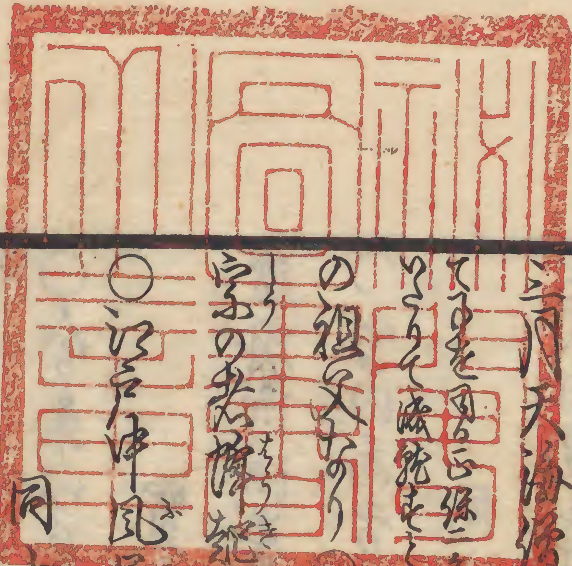
武藏

共八

内閣文庫	
番號	和 21933
冊數	9 (2)
函號	141 88



編脩
備用
典籍



武江年表卷之二

實永十三年丁酉

二月閏

三月天海傳西志類纂より切經二子巻を刊行せしむる

○八月秋生元南率儀者役を以て華以迴煉

の祖文あり ○七月八日星月を曇る ○十月肥前をぬる

○江戸津風長屋女之人語り不命一あり

同十三年戊寅

夏より各年二三月に不運なるまゝ遠くの男女作勢宗席

詣りたる事類

武江年表卷之二

○東光山初福七 和国を奪り 漢軍が城へ移る

○十一月 北川小糸松山東海と河割立 東山は 菴和島

○今年以来 豊國の首を捕り ありと云

寛永十六年 己卯 十一月 國

駿府河原田書院番へ命せしむ

○宇田為守を家刻 東山貞景和向漢軍あり 及び親世書をあむしりうつら

同十七年 庚辰

二月 日光山廿五圓濟神志子於修行所 ○二月より八月末まで

天下牛多く死に ○然願河東慶小糸つとせ 河丹方系中

りしる 寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

り 豊國を切害 一は 八月 月をこれの日と云ふり 命せしめ 漢軍を奪り

河原田の自ををめ 小糸松山と男名一の繋りあり 同席 北川

系女と云ふ 寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

世のうづらと云ふ けり 左系 世の舟

寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

系女 世の舟

寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

河原田の自ををめ 小糸松山と男名一の繋りあり 同席 北川

系女と云ふ 寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

世のうづらと云ふ けり 左系 世の舟

寛永十六年 男名一の意地ありて 今年に月同席 細枝うづ

○六月 長宗寺 耶蘇宗の族 黒船一艘 奪り 長崎 漢軍のりの

六十余人を捕せしむ ○九月 六日は 殿山 あり

夕暮を惜みしきまふ本のりたりと必き一色に海賊の月 以巻
寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町より火火登海日越へけし鎮守町被平七町武家
二百十軒被廢老の木の大小と云ひん

○流石堂園二百十軒巻成然 林道春生と主麻備士をまび
土山の傍に候被撰ありしと云

○東叡山五大陀院に巡行執事被擧る 上經五條天神社にて満天神
を合祭す

○二橋村を齋通町と号し 二橋村を齋通町と号し
中川町と云

○白米年 白米年 橋田より其の痛
福さる

○七月 兵衛ありて難由生王子権現縁起撰述あり終り將時
五馬の常あり

○秋米穀梅子被不熟 ○八月朔日大風船十艘の石

船取川沖に沈む 後流人この西を想と号し一浪小舟を十一軒
八月廿日作直は船取川より大石を積りしに船沈没せしを想と
号す

○八月廿日田島東賞寺子に生きたる像を並 興盛代迄あり
宝海上人とあり

○北へ流被流中河 二浦津
ん他

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日浪高を焼亡 以馬本村市義
とりの古終り

○二月より七月より天下大飢饉米價貴躍一死人多し 古救米
を即ち被擧るのり流書ふに流被りたれ
あふいたる也一以火の門おとりの多あり

○夏郡中候尋以古下向あり又月初向法障落の日障落所一守要と
被あり 其三人形由留町
弓原被後八天障落

○二十二月間堂始り 其三人形由留町
弓原被後八天障落

正江年表卷之二

とり由命皇子をのりてと上流家の徳をのりてつひに流徳をなす事あり
親世者と八幡を仰ふ事ありありの并傳ハ傍に在附ありとありあり

○あづま物語撰抄 吉永親見
記の始なり

寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘

正徳平順之副使趙綱來聘申行堂談波本抄よりこのとき
申行堂より不詳とありて林春永書述二山人本朝の譯考を
著す

○今年六月飛山人生春寂子ゆくと小山子ありを看るの
記あり山人生文集より見ゆ

○八月永代橋八幡宮を修繕始ふ

○十月二日天海傍正寂 數百年
三つり

二月より毘沙門堂法門跡に海傍正寂住職あり

○十八年の冬より今年まで肌腫續たり

○あづまめくら板渡二
始書名を色音漏と云一申すははは時代訛と極の花を弄する事あり一六文中は
そのを卷よりと云一橋の色音と云うぐの音より云ふ事あり一柳の音の音あり
江の音を記するの書を始と云

世年間記事

井上稿富よお大筒の町間を賦らし一不を後漢より後始と云

○正徳此亦才天の寛永中天津信正の基より一と比敷山の麓行生信
を授けしと云ふ事あり谷行丹葉後信正と熟熟と云うが板渡茶川古音信
の事傳人記をくして利終りて信正を導くありと云ふ事あり

○あづま保八幡堂新再建あり

○佛日山在祥と云ふ事あり中麻布其あり
坂本宗刻あり一と寛永中今の字橋の地より移るる靈と云ふ人信基
の事ありと云ふ事あり

○寛永中子日谷一行院基奉養上人寂 此ハ井原州度の叔謙と云
暎事傳より子日信基を降

○海城橋より松尾橋強正橋迄の川通り 八丁堀
たより 寛永中船
通用の舟より八丁堀通りより一不と云

○同亦不勅字勅坂の字不

後後橋 今長後橋あり實文
この圖もあつたせう 二二〇くじぬ 今の所川
ああり

以上寺院の号町名文字詳あつたされい系本小柳りて後字のまふ記は
○江戸繪圖梓抄すま本ハ實永小始り〜あや其よりいふのり世小
傳りて世傳の圖と南の世傳とせしは記りぬは世傳繪圖町の
入は海津を記りぬは小川町新田川津茶橋を記りぬは大川を記り
て載る所の方城校まういせが
もこま小同一 實文はよりいふ所いしは〜ああり
○世と通用の書翰の記は一糸海と記しぬは書く事は記しぬり
始りといふえり女子の一事と書かぬ事ハ事ハ又ふ〜ああり
ありと〜ああり 東海津箱系
まふふんえり
○本村孫十郎言致る續成か因後云校並ハ實永のまふ記は
おまはら〜ああり校行といふのを刊し是と〜あありの以は田長門と

始り製は葛藤も稀あり〜ああり舊の徳士お具をよは海津袋よ入是を
番袋と〜あありの記は〜ああり

○薩摩小車古 京及根の産
或記後云 江戸より申橋小籠り探せし所を真行を
○事海合考小浮箱隔

〇の〜ああり

○花浮踊りひんが書あとり所橋あどりつ小唄行 長清寺所記
りつ小唄もこの
貴族勢を言ひ椿花を弄ぶ事記 あつぬめり小實永の記の
まふあをりつ傳ふりあ

○中島浮雲といふの江戸あて求記旅を記し始 まういあ
あ

○春甚獨活云寛永の頃風俗男ハ草のうまうけ草の袴を

英後より女の紫草の足履をとりて我能たけまひとせり婦女の
 帯の分様を以て藤の詰り玉地小梅桜花を布く小織付て是を
 鉢のよび帯と名付て取寄しけり唐さくら小鉢尺の二寸斗の
 紙をとりて小鉢尺の八寸斗の八月まで婦女の礼後
 巾縁あり唐さ繻尺の八寸斗の唐を境ふ結ひてたきを付帯
 とり小今のりもあ帯の首の帯より唐一中畧男女の衣後首ら
 極く質素あり男子も女子も十に八寸までたけしをとり小
 むら小鉢尺の七八寸を極りとせり貞享の比より部尺計り
 ありまきよりやうやうまひ長くありて近き比に二尺に八寸計り
 をとりぬと見ゆ婦女の帯も貞享元禄の比よりも細く唐さあり
 て今の縁尺あり八九寸あり小綿をまんとおしね袴のごとく此この

肩うき衣きぬのりよりの首と麻の幅縁尺の八寸計あり一小貞享元
 禄の比より幅き尺および寛永の比より婦女細糸麻繩を髪を
 結ひてよとを巻きて縮めく巻一小貞後麻繩を止く紙をとり
 小糸糸の巻より粉紙をて元結紙とりよりのを造りかして流
 肉ぎの婦女皆是を用ひまとの縮めく巻事も止ぬと中畧江戸の婦
 女亦小糸糸をむらひまきまてて巻きて縮めく流面うめんを包く目ざり
 あらまけ其後縁あり流面を流しみ一小貞二十あまの室取
 の比ありま今らとりて流面を流しよひてまきつるのこもて面をり
 らあまてりてをよやく流面を流し中畧男の面をあまてりま
 りの流し流し編笠あしがきの肩の上とくをとりて流し一小貞女の
 小く帽子かぶをとりて面をくひもありたの流し小流面うめんのあり

ある物をつらり付て目計りをあそそく乃を引もあり亦此の
男の小神の裏を知り一感ハ知の肌衣を神に奉り一統をまゝ
計り一まひりゆるりゆりゆりのぬく目も女へつりて標の裏に裏
あそそくあそり下畧足ハ實永の以てり元福の以てり風の俗を云
き一たりの その以婦女の塗美小神の種福六尺神さま此中家草の
足袋木のり白木の骨董集集寺添考下りまひり

○ハ水随尊子云世々素深の神を切て上ト下ト一り一ハ松永深
正始つるこり一事よく人の初る事あり麻上ト下の裾を切一りも遠
くね事あり裏付上ト下トハ小坂遠足某の給仕とる小姓小始て
せしき一り一弘まりて今常後とままり夏の肩衣小物を用
る事ハ松平豆州侯とり始る海子肩衣小裳を用ひ一り小始
遠足侯二男政平小とり一まるとり又老人雑活小見へん一り は村子候一り
肩衣

ちんてま この名はうきんこ
半橋ハ近湯院山公小始まるとあり

○本綿屋は家今の創製法のもくあるはとと家の母始て製一葉を
片あつてつとせしれ一り老人雑活小見へん一り

○谷原名紙詰上而家昌寛永中大西村長并其津南を連て
江戸一ト向ハ 後永小坂
また終る 大西名所方其津清も此時江戸小より此属之
年此谷原とあり後永小所るは子孫代ハ江戸小始ま

○寛永の頃大徳寺町の豪家始りある某家の婢女とけつり人の
に意の志厚く朝夕の飯菜菜蔬家食あつた物をと馬人小絶
一り一りあつたもの残まると又ハ流の隅上細を編てたまり一物と
合一常小絶名あるは一志つる小衣比企小始り行が
ハ若湯院山一系流一は身の大日如來をねせんるを乳ひ一り

日が形容を着んとあふい戸小籠きて依久間某の婢女たけを扱
 けし〜〜の靈愛の生を世あり波家ふ〜〜の婢女を誦きと後作
 女の念仏之願あり〜〜大進をまを〜〜のふ〜〜後依久間の親ぞく
 了込某より大日如來の像を造〜〜ゆ〜陽殿山英令事不絶む
 こまを世ふお行大日如來〜〜
依久間の墓ハ塔とす塔中ハ元院あり〜〜塔
 在爾らうり〜〜以て後某の居徳とす江村より
 彼方の水盃の今も元院
 下ぬぬありありや
 ○寛永の以池森といふ和傍町小落を〜〜
 〜〜〜ん〜集りて〜尊遠ひよ〜ら〜いよ〜〜せり今以て〜のひて
 と氣遠の必同とあるより此池森と名を〜〜と〜〜
 人の笑ひを〜〜む後葛の七人〜を佛とて江戸大落を
 瀬廻とも〜ぬある〜ら〜ら〜〜〜波池森と名ふ〜ら〜ら〜と
 池森を佛ともよびけ〜ら〜〜世に流ふ〜ら〜ら

正保元年

甲申

十二月十六日改元

正月廿二日清彫初作吉忠若重繼七十坊上寺不濕盤石を彫

○寛永年中津波海向于沼百る江方の地を捨りて佃村の漁人なり

〜今年二月漁友を建並一本玉の名を以て佃島と号し本國
の膏土非伝若明神を奉祀し

○上野小倉眼大作中河原立以時未蓋眼大
の隆号あり○青山池森院扉刻

○二月町人の長刀若松若丸納の合羽等法傳上あり又傳勢大由家
布衣を穿てて〜事を守りぬ

○五月十九日琉球人東歸正徳合武王
武政王子○徳朝明治元年あり明亡ひて

一統以○本撰所六丁目尾村長三清若居始り二代目より後山村
長吉支那と改む正徳に年小あり其居形絶は

○十月十八日吉原宗基人正月甚古事の死六十九今も河津雲院
 下墓あり○十二月廿六日明人吳宗親卒二車被上行も小墓あり
 明教の乱を避て来り一人あり○二十三日重教一人も作被後より
 塚居久事也の交代に久松の山初也を建つるのなり
麻屋久事と号し今も未續せり

正保二年乙酉 五月閏

二月十五日丹赤くく丹の如く○二月廿二日田文坊右衛門宗道
 世しく空仁と号しけら廿一才あり卒後世の終世の初、和之墓あり
東之山中親成院あり
 ○冬、秋、田明神淡草より山登り梅は西あり一も秋山
源成院も此時新築す
 ○江戸にて怪く鬼を焼くと清氏果中氏をたてり
もの江戸九郎の元祖と云
 ○十二月二日長忠之孫
 卒八十三
 ○十二月十一日東海寺澤庵和尚寂世宗十七才之危頼小遠僧を清
原等をもつて其の宗をまゝに傳

同三年丙戌

十月漢去兵乱未止、明の版図平定し官ひつとりしん鄭世龍と云 車部へ授官を請

○冬、年、瀛松と宗割兵由正行孫師正基を奉んたり

○金工平田氏祖道に率共長沖朝鮮人より七宝流ちんせうりゅうの法を行へり

○大倉居氏於祐を軍府神原不友沖後を將を於あり、飛戸村
 へ宮居再真に

同四年丁亥

二月六日小塔遠路の卒友、東政一、藤繁の号、宗甫、今年六十九才之、宗被、孤山、菴、小
菴、古田、後、弟の門人、茶、道、同、利の人、和、舟、の、た、泉、を、於、け、の

○二月十五日夜月の暈は方月影の如く、曉の月には現るあけ

○二月廿日官医管迎院園奉幸活法平卒げんや 廣尾祥雲子
 子華に

○五月十三日江戸大地震上野大佛の像壊破さい○七月廿二日水滸みづ

○九月十五日刀劍同利本屋店方事終おき 織田あふは一人あり

○十一月十二日 台命ふより王子村小治に松平藩力不追お
真行あり る協いのまゝに十三万石に十万石を移す所の由あり
一しつり林を赤大追おより一を編輯あり

○十一月箕橋某より後向必比能と建 正世春海法下造とあり昔某が
湯乃中て乃湯小泉一ありと云

世年間記事

正保申日向必骨湯山の漸弱を藩忍より大坂へおせ大坂より京
下へおし内富士山鱈角と名付りの大内小止ありひ面おもむき無
二唐松の二種ハ水唐二年の以武江下をまより接つぎとて世
忍ふ分てり ○大橋を常盤橋と改められ正保の始ありとあり
○十河ひさひとて歌をぬく事ある十河辰とて武家の人乃歌
はきとりのひかふる事とあり又世時代流る意歌を好む在湯乃
名所記ふりの祭を世虫の声小橋りよと云とりのハ世虫の声

とありんとおぬきせとるを以て詞ありとて

○世事終るを以て時代系室町終の久吉世終の油を賣始むと後

二徳市仲字を賣油の五十年嵐是を創せらとていふての世の大好菴

菴せむ伊香右衛門とて始とていふ 伊香右衛門のあまの寛文申室町丁目(若虎)
中村らま油世世をわたりとありつとまある未詳

白水といふ女形世世をわたりこれ世世の元祖ありとありつとまある未詳

實に世保の代ハ祭の便世世とて格別上下とも不幸若き田の祭小世とて

○寛永世保の以長湯より唐本の商人和泉屋本と名所といふの

江戸を流り世の世小治に始て古書籍の賣買をせり後大書籍

也と後より是古本賣買のよりわくとあり

○武江家の西橋小正保申中江國の官本あり方城を廣一和川

湯乃南若相本雜司若約込よりある大川を流りて京市中の湯

寛永の國小治一宮中津市を境角に越後庄藩の藩士下赤
が居り日本橋の南ふもとに人塚あり其の南に浦坂の辺に浦
越の助友庄藩あり其敷山の東向小門あり其南に後津正
町あり

慶安元年戊子 正月四日 二月十五日改元

慶安年中改元ありしを

改年の法慶安徳の天下也 平井ト養

○春荒瀬山小亮朝院七面堂寛文十一年今の如く
寺田くうりつら

○谷中女命院七面堂尾山日知上人三匠の所身丈七面堂五日の所
尾山一室中一室一板を蔵し尚社を創と云

○四月十一日天海僧也慈眼大師と隆号をのり

○日光山二十二回所忘所法令法華八卷あり後永の系編法苑珠林の記
あり

○五月男色をむこひお掛尾尻ねまの事を林せしむ時行来
麻衣といふ英お年の事子付強勃ふ及ひし首く拘得る
りり男色の事此ときより止寛文の頃より又行来しりたゆ
ありて止つるより同書よりり
首の字云ふ男色をた尻を時道と云ふた
尻たふ尻尻の尻尻及ふ尻席の尻と云端尻
みくを
信云あり
○九月吉田姫稻荷社建立尾林兼友と
云人等附り

同二年 己丑

日暮里源坊明神社造営尾と六終の弟
初より一と云 ○大塚善門山大意寺法堂創

○二月日持社中野の
社あり 尚徳率尾十七年一が慶安
三年四月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武蔵大北震江戸中
武蔵町屋澤と死人怪人等
上野
大北

○九月十三日河越大教院尾廿二年小
尾十人等

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人系碇 正徳具志川王子之 日光山へ参詣

癸亥二年 庚寅 十月國

二月山王権現社 泚城内より花町へ移る 一説云く寛永七年山王権現社も此後万治二年今の所へ移る

○男女作勢字届へ系詣する事行る 今云ふ所は

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○二月十二日俠客情随院長を掃

死 寺傳人曰く終身とつとも終くとして定まらざるは穢慕い今も浅草深空寺あり昇舞妓の幸田を吊り ○五月國く波あり

○六月廿日法國毛渡 長に又す ○六月二日より清弟を親吉寺に普渡

○琉球人系碇 ○仲井絨起 ○八月七日後父邪多大風あり氷渡 大井八九

女より十女位

同江年 辛卯

東叡山 泚宮泚造營 二月後掃屋等家元不造と見しを泚再建ありしと云ふ

○二月十二日特社山雲傘 六十三才 枕是形 ○秋深川八幡宮ありて幣々忌の法

或をうへ流編り真行始ふ ○中村幼之宗寺居稱宣町八幡町

うらら ○十一月廿九日仲井の堂敷除伐せらる

○十二月廿七日常中威意より長上人寂

此年間記事

酒殿といふ事行る慶安のうへ大塚の地黃坊掃次池上の大蛇丸

産原をいふ名せし大酒の米堂を括ひて酒を呑み事あり

之類案を記し水記といふ冊子あり は去寛文三年山下移せり池上氏正徳掃屋の事

寺傳考小見えり又川清掃屋の田舎屋より孫五郎孫五郎をせし七合入の事あり中井掃屋の孫あり

○寛永以来兼意の以まへ冷浪あり 事後河町支留町乃

外も六ヶ所の商人一軒もあつて金子一つ二分つて銀或はかくの銀を
 ちりちり積りて蓄ふ事あり是の家町並通り町並此に町並
 の町並ありてこの事あり是の家町並通り町並此に町並
 千餘家とて數百人各々異つての府ありけ居てかき餘り蓄
 を貯すものありてある事と青物町並あり蓄一軒見世をか
 て徳儀を交へて九十六と本取の積を積累も今もまき分た
 り目にはあつた蓄一軒物も自ちあつて見世出つてとて江戸中
 六の店へあつた蓄一軒見世を目へて江戸中六の店へあつた蓄
 見世あつてとて以上事確合考少少抄のふまふ
云々相丁のふまふ蓄町のふまふ
 ○この時代毎年七月盆中ふくれの市仲の男女踊りまどを催し一夜
 賑あり○降後瑞穂藩麻を文相山丹後極虎を源を文相市上春

あがねを後を誘ふやびとる者南の春を文相行つ

兼寛元年壬辰 九月十八日改元

正月廿日の清眞は海島年とり十一日不滅る 十日曉雲降る所晴る

羅山文集

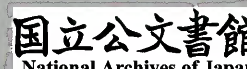
餅糎座上甲兜蓋 時有寒花發孟阪 鐵額銅頭賣銀否
 聖如白馬祭虫尤

あんえん ト まあげつ
 田川寺水月觀世音の坐を修造一海照山岳川ちとつりはらまき
弘法大師

安正有るの永福二年の冬火小焼きて幸か或因方不とて是甲夜小ありてをえん
今幸九月中旬燈を流すを流順一甲をえんとて是甲夜小ありてをえん

○六月ごうめあ流うら舟ふね舞ぶ妓き清制禁ありおが髪を剃りては紫の帽子をかきつるを流す
水小橋作詠市詠浮流橋そりの詠はあ
 ○八月廿八日夜に大風雨

同二年 癸巳 六月間



今年玉川の上水を都下小瀬にて元慶の用不充^充ぬる

○玉川上水のをくぬの方面甲及丹波山の幽谷^{幽谷}不獲^{不獲}同公丹波村を

つて成るる慶永^{慶永}なる甲及^{甲及}一の敷^敷より^{より}多津浦村と七里^{七里}藤文^{藤文}

羽村^{羽村}まで十二里^{十二里}までより六十と十六里^{十六里}計りて羽田浦^{羽田浦}より海^海不^不令^令に

九里^{九里}里^里余^余 兼^兼慶元^{慶元}年の春玉川^{玉川}を^を兼清^{兼清}右^右と^とり^りの^の形^形を^を羽村^{羽村}

より^{より}江戸^{江戸}まで^{まで}の^の形^形を^を考^考同^同十^十月^月上^上水^水を^を割^割の^の條^條を^を令^令せ^せる

おれ^{おれ}の^の翌^翌己^己年^年初^初夏^夏より^{より}仲^仲冬^冬より^{より}羽村^{羽村}より^{より}江戸^{江戸}大^大本^本を^を延^延橋^橋渡^渡

虎^虎古^古門^門まで^{まで}玉川^{玉川}の^の水^水を^を掛^掛く^くと^とり^りて^て後^後徳^徳方^方武^武家^家方^方市^市中^中

小^小分^分水^水して^{して}日^日用^用と^とす^す 海^海板^板山^山亦^亦玉川^{玉川}宿^宿高^高社^社の^の玉川^{玉川}
宿^宿を^を動^動渡^渡す^すの^の事^事あり

○神田上水を^{神田上水を}圖^圖き^き一^一年^年の^の始^始終^終あり^{あり}以^以武^武速^速編^編年^年を^を集^集成^成ふ^ふ久^久保^保

東^東天^天心^心申^申ふ 命^命を^を受^受て^て水^水邊^邊を^を考^考へ^へよ^より^り多^多摩^摩川^川の^の流^流を^を

小^小石^石川^川より^{より}引^引ぬ^ぬる^ると^とり^りて^て神^神田^田上^上水^水の^の事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

小^小石^石川^川の^の水^水を^を引^引ぬ^ぬる^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

玉^玉川^川を^を助^助る^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

友^友堂^堂家^家より^{より}引^引ぬ^ぬる^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

善^善徳^徳寺^寺より^{より}引^引ぬ^ぬる^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

て^て東^東武^武より^{より}引^引ぬ^ぬる^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

さ^さま^まに^に引^引ぬ^ぬる^る事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

事^事あり^{あり}一^一沾^沾涼^涼流^流

神^神田^田上^上水^水の^の井^井の^の池^池を^を養^養 多^多摩^摩川^川
年^年に^に村^村 池^池の^の旧^旧跡^跡 池^池の^の旧^旧跡^跡

多^多摩^摩川^川の^の水^水を^を流^流中^中荒^荒井^井村^村の^の事^事あり^{あり}令^令て^て神^神田^田上^上水^水の^の

助ありとある今この地を藤合村といふ おらあひ ちんげん 年終村より藤合と
 十二村を經りたる田村より目白倉の中まで二つふたは一流の流
 ありて大洗堰より江戸川より流る一流ありて小日向より
 なる府様所破の中を流すすつて年終村よりなるありの
 極ありて流るを あつり 号はなる流所業の極極を修ひ
 小川町を經りて津田よりなる津田よりなるあり又一筋は津田橋
 よりなる竜軍橋より年終村よりなるありなるあり又一筋は津田橋
 支國の辺渡町よりなる町敷九二百七十丁程なるあり
 支上なる通せざる前なる赤坂溜池のありを引直し所新くのあり溜池
 池のありてこよ引て用ありてありてありてありてありてありてあり
 然とありのありて万民遊り遊んで快樂の思ひをなす事極あり

津懸澤作きてり於ありのありてありてあり

○正月二日身は所門の内青山某の婢女菊よりありのありてありてあり
 の血を破りて害せりてありてありてありてありてありてありてあり
 までとも未実を あつり 知りてありてありてありてありてありてあり

○九月琉球人某 正徳必 改ま子 ○金剛子吉忠氏祖重次郎 八十二才

○新嘉坡易行院小狭客助よりあると稱するありのありてありてあり

○義徳二年己二月十一日と鶴一例の女の法名あり を以享和又化中鳥子 焉るありてあり
 舟懸波を揺るあり
 一の香を掘く

義徳二年 甲午

淡島と親世吉田娘 は附賽獲を合三日五の入れ小娘一妻候

○今年町奴津穿數あり 夏の中なる諸廣大権云衆ありてありてありてありてありてあり
西堂のありあり六右組ありてありてありてありてありてあり

顔を見せは息女七女と後他人小まゝと一は女子計付並若ある
 所不後面をうらふ之如唐の以迄六人ぬり候えうらきをさかへありき
 一は河津のほりい江戸中止む大火のよは後あかめんのよふ玉おちと
 一は若きうむりは若き病も玉ぶちと云編並さなりは若く寛文乃
 以ふ松坂といふ是定家の以ふ徳谷益也もそりあかともあり八分より
 策を中り又天和の以貞享の以より編並止る是若きあつ候
 上下は若き並ふ候と云く○大身は格別小身の人へ侍尻上下とも小
 上トモ又と橋計忌とて役立を免て歩けりも人もあり又六梅の
 二尺の身扱を録是扱一ける人もあり申間を一寸あるももも増ゆ
 一くあつと云く 昔くおとろふは時世の風俗教事らへ
 ○箱毛原中丸子村羽鳥持腹六天正中の勅法ありといふ兼寛の以吳及今はのそそ

小舟三巻といふ舟のさうく中風をぬひ是あつてけり歩叶をたは齒落て云浮かふ以終
 舟非人へ成この所おちりしうの神社を祈りてふ思候の吳語を以落る齒立地中
 以歩自在とあつとありて神社あまはしと番を敷り又清人へ非等あつとあつたれ
 江戸兼を柱の法人兼清群集はる多敷一うり一は水唐三年江戸大火の後自
 終りしと云く ○兼寛二年刊行の江戸圖不整然と今小押町の所あり
 浅草法門内了喰町の辺不雲光院弥勒寺所合多あつとあつとあつ
 徳寺徳安もせんといふト形数寺日輪寺知是院寺り林田川の今云
 新しと橋をいふ人橋林田橋を大炊取橋と記り日本橋西は屋
 といふ南橋町迄の町屋の内後原源左馬房 吳後橋 是定宅宅定弘菴南
 唐おひこセイフン吉琳派治橋おふらのあつとあつとあつとあつと
 本らう同二丁目本御くらりり町裏ら見え二十高りも町裏
 合春七高りありといふ水を八号町又作川町の水も八号町有山生
 法務所今の辺にありは紙橋辺といふ南は橋邊と云候 宿を承の寺小者

救字ありしつ増く一移りて之海大抵成り改まり

明暦元年乙未 四月十二日改元

梅翁の集小年号改元の録目

明暦也梅のあつてふひつらるか

とりよりあり改元は四月ありり

○下谷正徳寺宗刺関山慈堂和尚 和尚の寛文元年正月日寂八十 歿翌年大田空澄圓師と号を改め

○玉川上人今年より金ヶ滝院せし中津田同言ふか

○市谷平安寺月桂寺と改めむ ○六月廿五日於本寺之卒 林九 古丈

○九月朝鮮人來聘 正徳翠原坊新副使秋漳諭陽漢事 有竜翼旅宿本坊寺之韓人日光山海海尼

○十一月十二日医師板坂卜齋卒 名如春漢系寺中一医主院小齋を林行曾撰 是一碑六修善院あり卜齋(漢系寺砂利坊

○同 以漢系院坊町の山裏小塔田加州彦 の辺小文庫を建和漢の書籍を収め 漢人不備むこれを漢系文庫といふ

○同 以漢系院坊町の山裏小塔田加州彦 の法下中宛ありは内いふ大なる土塔を造りて内小和漢の古抄万巻を

移へらる世小漢系文庫と稱しりりり

同二年 丙申 四月

正月廿二日夜春雲雨ふあつ ○正月廿九日びせのの月己の夜委小 ては家の裏にわびせのの若かまをたふと命を

○浅草寺山門の仁王堂この以漢系を造りて世小と云ふ一は後孫 よきま

○六月廿七日親世を美初建能具行 非田橋寺 田原の裏

○六月廿七日親世を美初建能具行 非田橋寺 田原の裏

○十月九日吉系町を以 田原の裏

○十月十六日夜長後町よりお火水風 小町刻十 田原の裏

○十月十六日夜長後町よりお火水風 小町刻十 田原の裏

○十月十六日夜長後町よりお火水風 小町刻十 田原の裏

明暦二年四月尾板の江戸船場の内えき番兵に丁三丁すこ町系町新町の各ありて
揚屋町の名あり一邑いえ番兵二丁に官の地を今の地とて不割増ふして代地をのり
しあすこ町の向ふありふ町をひきききとて三町の中ふ二町三町あり一
揚屋と二つふありて揚屋町とあつて一とありえ地の四六とあり一三町町役
町兼波町とて三箇の名目あり
ふよりめて一町名不詳とて云々
○二月廿二日羅山先中率
七十五才横巻番長乃
別業ありとて元禄十二
の災後身也
山伏町不詳

此年間記事

東本願寺新田明神の下加賀屋敷と唱ふる地のおふあり一と源
中津若今の地へ移さる大火の傳 一と東本願寺加賀屋敷と唱ふる地と本多
紀後庵の庄中た元房町の西六太田徳布庵の庄屋ありとておけ辺
皆武家屋敷とありあり一とあり西本願寺横山町の辺より築地へ移る
○武蔵野あざとつる草紙あざの大火の
災後の事をとりつる件お白旗町
とあり押原と町を二町ののけられさすふはるを以て東西十町

あざり小土をを築せしる日本橋の南町とりに日市迄の町屋を
九りのあざをにふるふ川橋下とて心をつけ東本願寺町せよとて
上しる又日本橋とて東橋まへ八町のるふ町屋を所を九のけ
合町二十とてひろくあまう是ハ町屋屋のせきつひ徳人のあ
上り入込中もとて秋ハ災ををか一人をことあ本願寺のなへよなる
ゆへ土を築ししる江戸中のものいふ後事ありとも還のりかはつてとて
あざのいふのありとて云々

○大火のあまう日本橋通に下り北の側細き道を五輪町とつる此町お
不せきを築るを他る上居とつるゆへなり

○災後茅切町あり一茅商賣のあまを橋向へ移さるは後元禄
始の以本所はつ目へ移さるとして本所茅切町とつる

○世時武家の属邸後時多一又寺院も不替あまの月吉祥より
 あると揚より約はし揚また揚田を吉祥と揚より因ち表の事ありあつたあり
 霊山より深空寺法禅よりまも湯治よりなる大に後浅草へり川
 瑞林寺昌正揚より谷中へ揚。鼓吹より八丁地より浅草へ揚隨云
 院日瑞寺今の系文 揚の西へ 揚頼寺今の小 押込 井田より勝蓮(雪蓮)と天徳院あり
 東門内より浅草今の地へ揚

○世時代今の如き英會を商人の文より一水馬英後合終山乃
 門より始て兼版豆齋汁黄澤大豆をここのへてあるは東と名
 流けへかせしを江戸中揚より合終山のあつたを喰ひふゆん
 とて縁の糸揚より現る小真よりなるあり

○浅草見附前玉屋幼五郎清無屋利を造りりお新若くは始り

猪牙形を創りて山音通ひの案こまの事あり又研より迄きこるり

ありて通ひしもゆりあり奇流考より應の系紙小妻一 是の日のと
ゆりこのごよみよりあり ○紫植より小唄兼踊をたぬ還綴紙料よりりばは若舟
ありしころの事あり ○水磨は幸山勝冨齋の遠遊紀行より鈴より舞子あり
ぬまひあり

つらありて毛を將けしを声鈴のわしを以人論をあり兼恋
 のひまもありありん ○単曲柳川檢校八橋檢校行八橋八實文
 ○水磨三年の江戸圖大坂町今大橋町一丁目 阿比の町今小舟町 中
 あり井田撫留町の濱井兼若ちまとあり二丁あり

可治元年 戊戌 十二月間 七月廿三日改元

正月元日夜市谷安養寺と二世秀峯の墓より石の老翁形を
 和舟を係り自撰とありてあるとつて将船社を建ちより

とらり まげん 著一といふ所 ゆり のり

○正月十日 中 火引換 中 大羊焼亡 東洋

○二月本換町海 小日向 築地 小日向 築地の時この山を

引田 中村 地敷を 中村 〇四月十五日 中村 野田川 中村 依政率 中村

○六月九日 中村 菅 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村 〇夏 中村

洞房

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村 〇八月 中村

寛文中板引

万治二年 己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百廿五戸あり
○日本橋を掛返らる本年正月無火の橋を返らる

○二月山崎雲海翁再江戸遊八月序より再遊記あり

○二月廿一日水田子協山王権現社今の地古造営今日内遷あり

○七月二日大風暴あり除雪内務二儀あり

○九月深草元法法師母を誘ふ身処山不修ける

死の身処死の身
身処死 万治二年

九月五日池上九月五日池上より上入信中

日本橋邊日本秋 更無一事掛心頭 今宵新見江城月

影満扶桑六十州

せき木小並居てつきくちあつて唐のやまとの又さうらふふんつとや
幾日ありらん或は信傳り寄よみんをかりともあり母六日のあ
らりその破小の居あつて井の余所ふひかからりてうらめ
さる附あり本附財難きとも格高の月といふるまへてあり

ふささまへてあつておれおれも様ころも神の思ふまへての月
うねあつておれおれも様ころも神の思ふまへての月

月もまへてあつておれおれも様ころも神の思ふまへての月

○中谷永昌長者町長者 恒居の所云 の墓とくありと元院板本巻

去安居去万治二年亥九月廿九日とあり年号新しけは銀

總州為尾武為頭

○本橋町五丁目小森田を所領賜給て其居真行は後代に幼孫と号し

○五月霖雨あり○九月廿五日に基所二世大橋宗桂卒二年板上行ち小橋宗為の禱

○むさしあがき二巻梓行段澤大士ののて祀せる也之はまのの流しとよりの

此年間記事

上野小令銅三丈三尺版の大仏の像は磨万治の以本會澤雲再建也

○大久保法皇七面宮勅請○明人陳元寶波國の礼を遊也

○本邦にありて言ふ田舎町に本基山を賜ふ小偶居を以て所領人

後村七郎重隆後員次所を賜ふ二浦と次を賜ふお小治りけり明人を

捕らるるありて其を殺すを可らるる小志ありてあつて二人は神を以て

○寛文元年 辛酉 八月國 四月廿五日改元

○正月十九日の秋光物ありて一花ふを光物軍町にありて一

○正月廿七日曾通町より火火大士の辺に治橋宗橋の辺

○二月十二日林漢耕稼卒三十八才也其後号し函三子兼發して春産と号し

○二月十二日林漢耕稼卒三十八才也其後号し函三子兼發して春産と号し

○二月十二日林漢耕稼卒三十八才也其後号し函三子兼發して春産と号し

○二月十二日林漢耕稼卒三十八才也其後号し函三子兼發して春産と号し

○羅山文集刊行 百五十五卷六十年 ○飛戸で瀧宮今の地(宮建橋)
心字の池及橋等 以年八月系紀神書列示の依武家府の例 地を巡りて橋を築く 本年西の
「形」の橋の授 ○本朝編年録を本朝通鑑と改めぬ

○八月十五日飛塚海(海)の宿山念(念)和尙 存世子及後子 念佛三昧を
引く程あり ○今年より天和二年より引いて飛戸村を結

平安方度々の洞佛を鑿りて漆る 飛戸村を結 天和二年より引いて飛戸村を結
き〜あり 飛戸村を結 天和二年より引いて飛戸村を結
天々 一母

寛文二年 甲辰 五月圓

○賀賀八幡宮修葺 ○飯田町法務新入小令せしむ

○けんぢん蓄蓄切始 價八孔 ○七月七日連舟作里村玄俊率 廿五

○市村作と惣玉川を橋おた元々芝居具あり續記云引幕大

そ具多かりし

同五年 乙巳

正月五日連舟作里村法眼玄陣率 七十五

○秋絹布の世廿二丈六尺小定〜 ○八月舟高人け鯉の古記を新じ

く目せ〜信今〜き市作へ令せしむ

○八月系紀の医師 その一ゆんせう 江守〜りの紀行あり鎌倉紀りを

合〜二 ふゆう 本朝の儒学又百職の史文 あり令家解もいんを引せり

○霜月宮まへ五門跡市下向の時隅田川あり

帰るされ冥府の里小者もあれす〜川原のありぬ極ふ道見親主

○徳和澤秘録の要を掲ぐ〜江戸本換町小大和を慶〜云医あり

又同町小澤を〜系兵衛長谷川助吉馬〜り小浪人彼を巻片

入魂一人くのが入魂らる事神祖男女の媒妁等の行状して謝物を交わらる武徳彦の息女縁起の事神祖御をうまふようぬくみをおせしうの事家族に實文を以八月追放せらる其はとらして後計をたひ人を乞養といひけりといふ

寛文六年 丙午

二月廿六日人形のおと光おあふ花長三女殿

○不受不施の傳配既 ○東叡山浄橋建時の境

○津村幼二前うま居少くお漏をとりむお漏は長年行記本の著者ふんそく

○九月一日林梅洞車子に父名敷号梅洞幼亭後年春張と稱す

○芝金杉海多百餘石の地を細子協尔洋成一月十戌年九月町割ありて新細町といふ

同七年 丁未 二月四

三月府中六所宮法再建

○二月赤松大納言下向の時南田川をさす

そはたぬの於言まで隅田川に際する人知人 龍波井水

○五月梶井宮隅田川に遊覧あり

おとせん名くしり後まといとく於ら遠き隅田川に

○七月の末赤川権三郎神道の字をりて 戸名をりて 権三郎の義は神祖の

後をひらめたりをりておを記せし人又并せりておを賞せりて視書集をたす

神祖のおひらめたりて老のまきまゆふつきて作所成りれ

あやかり奉のぶをりてとて終るを法く世のまのりて也

そは外三首あり社地をのりて一は安室中ののりて社地といふは比の社地ありて一は本所

かのうへ小卒のころとあるはてすは
びはより卒とくちしと知くせしなり

○目黒直指院揚巻室と道々者入定に
直指院の揚巻とて本食の
聖あり念佛の暇仏を刻
わきこたへ小卒の安座に同業を小卒を結ひ世味の人をいへ念佛をすむ寛文六
年二月被宿舎の時即年十月廿日被せせんを知らず供人小卒く又西中いり
乃ん若あり世の中のをを感へて終へし妻子を被直指の身よりありけり
所小卒とて被せせんといふ今年十月十八日十念をうけ日れ六續飛大匠と成て虎生の夜
橋を拂んとて剣をぬき穴中入消人念佛の言とやも小士を被入て斤所小僧む又揚巻
と十月廿日小卒とて念仏被返すはひに十七才小とて眠るるや被せしは江戸中とて知
らるゆ加多宿巻集まると幸願しうり
しとより以上江戸名所記の又を畧す

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より雲の方小等まての如き白氣立夜に雨降り
○二月初日東上刻牙込酒井家五ヶ所を火より火出蒙ん前町法
士町市谷田町小等同日又市谷天龍寺寺内より火出絶戸同ん
屋敷山齋通同んを火出上澤福徳坂武家方六番町火出火一五番

町二番町糺町一丁目より六丁目まで橋田辺徳彦山屋を火出
あつひ小辺を火出方新橋まで海辺を火出又法業の火上より
火出後河邊辺津田橋鎌倉河原日本橋まで焼亡之方の火の
一筋小あり火出町屋騒く焼失せり又同火出町屋谷竹一
より火出法大必屋を火出○二月二日日輪二ツあり火出
○同日辰辰少別さめ鏡ろ橋より火出法大必屋を火出焼赤坂町を
日輪橋へ火出火二田七町火出法大必屋を火出焼赤坂町を
又同日中若東坂より火出中若東法士町火出徳彦山屋を火出
所へ火出一二の橋町を焼亡○同日六日東上刻小日向築地武
家より火出新橋通町牙込酒井の内へ火出初焼く田安法門
のうち小入又柳原法大必屋を火出より火出本齋通町版田町あちのき橋

坂多末焼亡 古二日の火事武家屋敷二百餘軒町屋百
二拾七町焼寺院百廿九宇百軒屋敷百七軒とあり

○二月吉原廊内り新芝をひく丸塚町伏見町と号氏伏見丁の
幸吉の
古塚ありあり
名つけしとぞ ○二月町人常刀さる事を林せしむ

○二月幕末山下向此時
月夜林檎木ありて作手見ゆる雲を雲らるの姿を名を虎虎を拜
雅章公

○夏徳玉昇 ○二月より三切先山門焼く是と云ふ徳玉の
焼つたり 虎の山門と
幸指山門のりく新橋を搦く

○水宿より半室水坂坂村介土中を穿ちて合像五寸の観世
音を好より背子刻して弘長二年二月とあり伊豆人伊豆人
本平とを
嘗て安あんちとて夕ゆふ敷ふきの観世音を是なり

○十一月十三日後八代市幸率三十五 ○或書小寛文八年江戸小世三番の
歩行後ありきり 観言札不修りて大洲九段小男女

○昔くお徳おむむく八家様又のちくおてに十八歌ふ日
万日の回向振とて人集はる事を一寛文中幸お始つとあり

寛文九年 己酉 十月四

二月に日浅草十五堂焼亡 ○二月二日流星アウセウ在ふり喜慶しうけいの如

○奉公人が替り二月二日ありしう今年より二月六日と改る

○飛戸を満家社地不法焼坊を初清一社を営む

○七月旗夷人札を去り十月までお松前屋より平おあり

○七月十八日能人石田末将率八十歳文徳系
世を継ぎし ○八月十日大地震

○大洲河系流溪家数後 家数人住より久友馬の寺并春た建つ叶

常雲白水市大雲つきたり

寛文十年 庚戌

五月十一日辰下刻より巳半刻まで崖の如く成り降ふふ九とて尺六

○八月大風 ○八月朔日不忠系天社の御土地を築立小堂砂のごとく

を建内外の書籍を収めて法人小としまに納めしむ天和二年 東の山宗

学寮を立虫籍 ○本朝通鑑成二百七十二卷 飛山警書二先生編輯

同十一年 辛亥

八月朔日不忠系天社の御土地に編修を建す

○白金瑞雪を冥剣飛山本巻所 美築船匠之 ○七月後水尾法皇御戸天満

文の地震等乃額を賜ふ ○青山法皇御冥剣

○七月琉球人來正使合武王子 日光山三年迄 ○八月廿九日南大風雨波あり後系下宮 小日向寺外

○十二月十二日晴天震動あり

是に所あり所降

同十二年 壬子 六月

二月二日午込津福橋板敷付あり同慶寺一人一板を付ち遠流小ませしむるはこと

○二月初を左神樂小島宮に奉を止らま大佛を奉せ町中初を

以てはりの弄りやがうき足結の行人着水穿撃ありうやうや入偏洲家 図彙小のせや撃の

男行獲(刃をう)ぬきしり形のお黄おて獲剛あり ○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改年お天 結治

○七月十一日持神元俊秀伝年八十五才

此年間記事

此年間記事

不忠系天の島へ石橋を渡しき流の通流と成は流八宮水の中 橋をくわして敷れ

○品川御殿山へ橋葎を植させしむ

○軍学志山鹿甚五左衛門名の素行 恨人多 寛文中津を犯し古き清時彦

の邸小幽せし是迄室二年小なり先一返さる貞享七年九月廿七日

山麻流十八部の ○江戸より代八車を他八人の力小代る江戸の身込家冬冬

世事治時神主大八といふもの川藤氏とあり一以上を

○始く元結を創製本をばか一これ八車と今も利する事と記し

○世時代男存正は家の一本小水板六本木の麻布入り板の下あり文七元結

○大の頃徳治作未得未加友一貞心友藤子

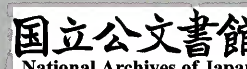
○降達前降達ハ水板の傍あり世小左一

○春鈴鈴魚釣の事江戸小知る人あり一江戸 寛文中上総

○大の頃狭客の額を披上る事一江戸あり 浪客の宗因宗因

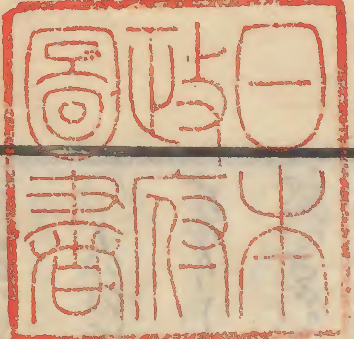
○寛文十一年より十二年迄梓行せる遠近遠近江戸國府江戸

○寛文十一年より十二年迄梓行せる遠近江戸國府



武江年表卷之二

南二月經原加々播板とあり
郊外を加つて
こまに始りて



武江年表卷之二 畢

